



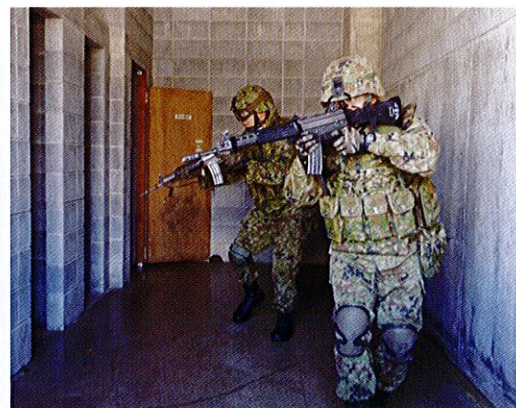
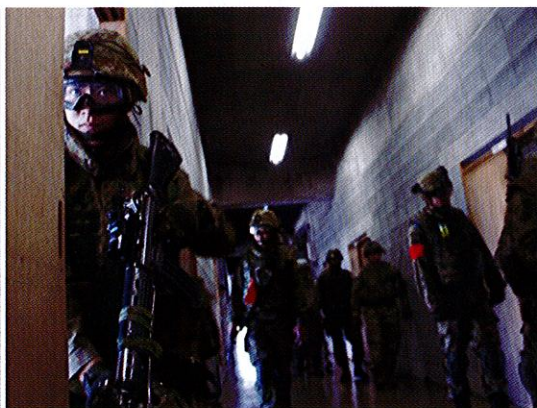
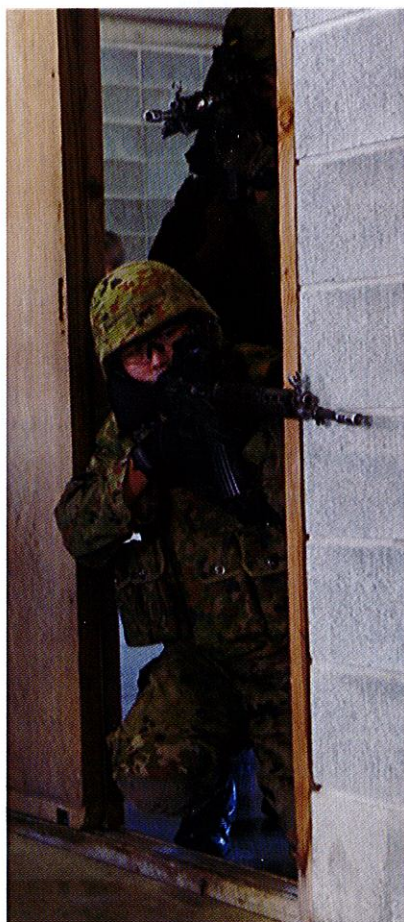
◇写真上は「第一線救護訓練」の一連の様子です。日頃見せてくれる隊員の穏やかな眼差しとはまったく異なる、眼光の鋭さとその迫りに圧倒され、TVクルーやカメラマンも、さながら事件現場を取材しているかのように慌たたく、緊迫感に引き摺り込まれていった様子がありありと見えました。

して採り上げ、テロの拡散や対策を交えて逐次報じていますが、これは、自然災害の突発的発災の教訓を、我々国民に促すべく警鐘であると受け止めるべきなのです。何故なら、中国は軍事大国化と海洋制覇を国是として掲げ、国際社会へ強力にアピールしているからです。従って「尖閣」が中国にとっての地政学的要衝である以上、何れ強硬手段を打って来る事は明白です。一方北も、国連の経済制裁にも動ぜず、依然暴発の警戒を怠れぬ、危い独裁国家です。

共同訓練には、「安保法制」を引合いに、多少異を唱える人もいますが、日本は、海洋列島国家と云う、守備範囲の広い歴史的宿命を背負った国です。主権の及ぶ海域もシーレーンも、「安心・安全」の境界線です。しかし、自衛隊は隊員数も装備も少ない上に、法的制約の下におかれた防衛組織です。日米同盟を基軸に、友好国との緊密な連携を計り、頑強な防衛提を構築するより他手はありません。つまり、共同訓練は、無謀な挑発や暴挙、そして、不測の事態を未然に防ぐ、言わば強力な抑止力としての意思表示であり、予防措置でもあるのです。

「東奔西走」・・・これが隊員の方々の現状です。今後胸を張り、誇りを持って務めて頂くには、法的明記とその支持こそが何よりの支援であり、我々国民の果すべき役割なのです。

編集部・吉田



陸自：第1師団第34普通科連隊の勇士が、立てこもる敵の制圧に向かう実戦さながらのシーン。

